

The WAP of the lost tradition 失われた伝説のWAP

・日本名	サカタ 11式型 ヴァンダー・パンツァー
・英文名	Sakata Type 11 Wander Panzer
・コードネーム	レイブン(Raven) ※大型のワタリガラスの意。不吉の前兆とされている。
・全高	7.7m
・全幅	3.2m
・乾燥重量	9.8t
・速度	前進: 40km/h(R.D.時: 200km/h) 後退: 40km/h
・備考	HP/5700 ・ Power/1000 ・ Acceleration/40 ・ Turning/90 (WAP標準性能規格より算出された数値)
・開発元	サカタ・インダストリィ (O.C.U.日本) ドミトリー公社 (ザーフトラ共和国)
・製造機体数	確認されているのは8機 (公式記録4機) (プロトタイプ・予備機等を含めるとこれよりも多いと思われる)
・搭乗者記録	ドリスコル(U.S.N.) ゲイル(U.S.N.) リーザ・スタンリー (O.C.U.) ※未確認



アロルデシュ国内で撮影されたレイブン

- 概要 -

現在は、企業解体してイグチ社 (O.C.U.日本) に吸収されているサカタ・インダストリィ社 (O.C.U.日本) とドミトリー公社 (ザーフトラ共和国) が共同開発した重量級ヴァンツァー。この機体は”メタルワーカークプロジェクト”の第一試作機として製造されており、ヴァンツァーの世界共通規格である「MULS-P」に準じた構造ではあるが、各パーツのサイズは一般的なヴァンツァーと比べて約1.4倍の体積があり、直接的な互換性は一切無い。通常WAPの装備武器も搭載できるが、機体専用の兵装も数種類が完成している。大出力のジェネレーターを搭載して通常WAPと同等以上の機動性を確保しつつ、可能な限りの装甲を施し耐久力を向上。さらに攻撃力を大幅にアップさせ、単機での作戦行動を可能とした。

BDシリーズ (後述記載) にも対応しており、BDに合わせて機体もアップグレードされていた。Xシリーズの試作機 (Xシリーズは30機余りが開発製造されておりレイブンやアルゲム (X-02) の技術が後続機に使用されている) でもあり、後のXシリーズの基礎を築いたWAPでもある。そのため、機密価値の非常に高い機体でありWAP技術の性能向上に果たす役割は大きいと言われている。

完成は第二次ハフマン紛争前の2089年 (2088年とも言われている) であり、戦闘記録で一番古いものは、Vampire's (ヴァンパイアズ) の拠点でのO.C.U.特命傭兵部隊・チャリオット隊との交戦と思われる。

▼グレードの差異

兵装や搭載されるBDシリーズの種類、搭乗者により様々なタイプのレイブンを開発されており、そのグレードも多岐に渡る。しかし、名称の差異はほとんどなく”サカタ11式型WAP (Sakata Type 11 Wander Panzer)”と表記されている。なおドリスコル搭乗機は、開発当初より”Sakata Type XXPT”との融合が考えられていたため、独自のカスタマイズが施されており”サカタ11式型 DS ヴァンダー・パンツァー (Sakata Type 11 DS Wander Panzer)”と表記され、明確にグレードの差をつけている。

▼名称の変更

当初はXシリーズの試作機として研究開発されていたため、他のシリーズ同様”X”の型式をつけられ、”X-06”と呼称されていた。Vampire'sの解体後もXシリーズの中で唯一開発が続けられた機体であり、これはBD搭載を前提とされていたためと思われる。いつ名称が変わったのかは定かではないが、ラーカス事件前にはXの呼称は廃止され、レイブンまたはサカタ11式型WAPに変更されている。

- 機体構成 -

攻撃力 /	基本的には、クロウと射撃武器を装備しているが、どちらの攻撃力も他のWAPを大きく上回る。 ただ、アームの構造上肩部にミサイル等を装備出来ないため、近距離戦闘が主になっている。(遠距離からでも攻撃できるようにキャノンの内蔵したアームも開発されている)
防御力 /	大型WAPのため装甲も他のWAPに比べ厚くなっており、ミサイル一撃では致命傷には至らない。 また、肩部のシールドによる回避行動も可能としている。
機動力 /	重量級ヴァンツァーにも関わらず、機動力は通常のヴァンツァーと同等、或いはそれ以上と言われている。 転倒事故防止のため、脚部には通常WAPよりも多くのアクチュエーターが使用されている。
その他 /	後期型になると、モニターアイに改良が加えられ、電気系統の強化が図られている。 (モニターアイの色により判別可能)

- 製造数について -

現在、確認されているのは8機であるが、その全てが所在不明となっている。

運用テストから実戦に初めて投入されたのがX-06、後のレイブンである。O.C.U.特命傭兵部隊・チャリオット隊との戦闘で破壊され、Vampire'sの拠点と共に跡形も無く燃え尽きたと言われている。また2089年～2090年にテスト運用された後、ニルバーナ機関に移送されたとある記録はこの機体でないと思われる。

内4機に関しては、U.S.N.陸軍ドリスコル大尉（ニルヴァーナ機関運用責任者）が搭乗したとある。しかし、O.C.U.陸軍傭兵部隊「キャニオンクロウ」（正式部隊名：O.C.U.陸防軍第2軍 機動部遊撃機動隊第1部隊「キャニオンクロウ」）によりその全てが破壊されている。ドリスコル大尉による戦闘は、第二次ハフマン紛争以前から終結後も行われていたと言われる。

内3機に関しては、U.S.N.軍のゲイル及びブラック・ハウンドによる搭乗が確認されているが、これは「BDシリーズ・B型デバイスバージョン」として製造され第二次ハフマン紛争後に太平洋コロンビア沖において、U.S.N.海軍戦略空母「サンタバーバラ」にて使用されている。この際もケビン・グリーンフィールドら7名により破壊されている。

最後の1機に関しては、製造されたのではなく再生されたとある。ドリスコル大尉搭乗の4機はキャニオンクロウにより撃墜され破壊されたと言われている。しかし、U.S.N.軍は破壊された3機分（どのレイブンが回収されたかは不明）のレイブンを回収し、それらのパーツから1機のレイブンを復元させることに成功した。具体的な詳細は掴めていないが、後にU.S.N.ファイアバレー社が所持し、2102年に開発に携わった一人であるグライコフを経由してアロルデシュ人民共和国へ送られ、O.C.U.の手に渡っている。その際O.C.U.陸防軍情報部「リーザ・スタンリー」が搭乗したのではないかとされているが確固たる証拠は残っていない。現在の行方は不明。

また、これらは戦闘により確認された型及び施設外に運び出されたバージョンの総計であり、開発元の研究施設には予備機やプロトタイプ等の機種が存在していると思われる。そして、「BDシリーズ・B型デバイスバージョン」として開発された物もあることから、その他のデバイスバージョンのレイブンも開発されているのかもしれない。

特筆事項

かつてサカタ・インダストリー社が研究開発したBDシリーズ（生体COM）を標準装備としており、2090年のハフマン紛争の際に実際に搭載され使用された。初期段階では、培養脳を使用したBDシリーズを装備しており、その後デバイス研究が進み、第二次ハフマン紛争勃発付近においては胎児の脳を使用したBDシリーズを搭載することになる。

そして、成人の脳を使用したB型開発が始まると、培養脳と胎児の脳のBDシリーズは終了する。B型開発後まもなくS型の開発も進められていき、第二次ハフマン紛争後にはB型（Karen/SI BD-6kr）を搭載したRAVENが開発される。ただ、動作が不安定だったためその調整に時間がかかり、S型の完成と同時にB型も終了することになる。

S型については、「ハフマンの魂によるロングリバース島爆破事件」の際に使用されているが、これは搭乗者の脳髄を使用したもので、本人も転換手術を受ける必要があったため、S型を搭載したレイブンは1機しか存在していない。

O.C.U.に渡ったレイブンについては、BDシリーズに対応はしていたが搭載されていない。

開発機

X-06 （搭乗者：レイブン / ドリスコルのコードネーム）

Xシリーズの試験機として、またBD搭載機として最初に開発された機体。BDが完成していなかったため、先行して機体のみ開発が進められたがソフト、ハードともに未熟で、特にWAP起動までの時間やCPUの誤作動、衝撃時によるパーツ異常等電子系統が致命的であった。試験機ということもあり腕部にハードポイントを設けシールドを装備したり、背部ハードポイントには専用のバックパックを搭載したりと他のレイブンとは明確な違いがある。

TYPE —



Arm R
RAYVEN PUNCH（※1）

Arm L
RAYVEN PUNCH（※2）

Shoulder R/L
TYPE 11SD

BDシリーズ
搭載されていない

※補足

試験機であり発展途上にあったレイブンは出力不足に悩まされていた。そこで専用の大出力ジェネレータの開発が進められた。通常WAPでは搭載できないほど大型で、レーダー・センサーユニットを併用しているものであった（三叉になっている構造は、上部2本がレーダーユニット。下部の1本が補助エンジン）。当時としては大出力を実現したが、あまりに大型すぎるため通常WAPでは逆に足枷になってしまい搭載は不可能。

腕部ハードポイントには専用の盾も開発され、TYPE 11SD（レイブンス）シリーズと命名された。初期にTYPE 11SD（レイブンス1）が研究されていたが、更なる防御力向上を図るためTYPE 11SD2（レイブンス2）が開発されることになる。肩部から腕部全体を保護するほど大型ではあったが、期待されたほど防御力向上には繋がらなかったため開発中止となった。以後はTYPE 11SD（レイブンス1）モデルの強化が進められ、レイブンの肩部、腕部一体型の盾として開発が続行されていった。

※1 内蔵打撃機構（アールアッソーSP通常装備）

※2 内蔵打撃機構（ゲイルII通常装備）

DS GRADE （搭乗者：ドリスコル）

レイブンの中でバリエーションが多いのがドリスコル搭乗機である。BD搭載別に機体が開発され兵装の種類も多い。ラーカス事件を前後して以降は、両肩に装備されていた「TYPE 11SD」を腕部と一体化させ、両肩のハードポイントを取り払っている。レイブンのハードはほとんど完成されていると言っていいかもしれないが、ソフト面のBDが不安定要素が多くその実力は出せなかったと見るのが妥当であると言える。

TYPE 1

TYPE 2



Arm R
内蔵打撃機構（※3）

Arm L
TYPE 11 CLOW-C

Shoulder R/L

BDシリーズ
培養脳を使用していると思われる



Arm R
TYPE 11 MG

Arm L
TYPE 11 CLOW-B

Shoulder R/L

BDシリーズ
胎児の脳を使用していると思われる

TYPE 3



Arm R
TYPE 11 CANNON

Arm L
TYPE 11 CANNON

Shoulder R/L

BDシリーズ
B型—Karen/SI BD-6kr

TYPE 4 （※4）



Arm R
内蔵打撃機構（※3）

Arm L
TYPE 11 CLOW-C

Shoulder R/L

BDシリーズ
S型—ドリスコル

※3 ウラニオ・マシンガン通常装備

※4 詳細は以下を参照（[RAVENと巨大機動兵器](#)）

B GRADE （搭乗者：TYPE 1-ゲイル / TYPE 2-ブラック・ハウンド）

B型デバイスバージョンとして特化させて開発されたのがブラック・ハウンドに配備されたB GRADE（仮称）である。しかし特化させたと言っても、パーツはDS GRADEを流用させて完成させた。外見は同じだが内臓兵器を変更させたり、プロトタイプのRFを装備させる等兵装は後から変更されたものと思われる。なおこれらの機体は、ニルバーナ機関から戦略空母サンタバーバラに専用ポッドで輸送された。

TYPE 1



Arm R
TYPE 11 CLAW-B

Arm L
内蔵打撃機構（※5）

Shoulder R/L

BDシリーズ
B型

TYPE 2



Arm R
TYPE 11 CANNON（※6）

Arm L
TYPE 11 CANNON（※6）

Shoulder R/L

BDシリーズ
B型

※5 [ZIEGE P] ライフル標準装備

※6 ドリスコル搭乗機とは違い内蔵マシンガン装備

— GRADE （搭乗者：リーザ・スタンリーの可能性が高い）

他のレイブンを別記載しているが、これは製造されたのではなく破棄された3機のレイブンを回収、再生させた機体である。組み上げられて保管されていたため、戦闘データはとられていないが2100年代においても通常WAPの性能を遥かに凌いでいた。なお、右腕部の兵装は内蔵打撃機構のみで射撃武器は搭載されていない。

TYPE —



Arm R
内蔵打撃機構

Arm L
TYPE 11 CLOW（※7）

Shoulder R/L

BDシリーズ
搭載されていない

※7 別名 [RAVEN CLOW]

- 主武装 -

CROW

Left Armのみが開発され、確認されているのは以下の4パターン。

CROW-C

初期段階に完成していた格闘専用アーム。3本の爪がアームの先に均等についている。

まだ、研究段階にあったためか強度、破壊力に難が残る。しかし、3本の爪の構造は他のCROWに比べて物を掴むという点においては特化している。

CROW-B	CROW-Cよりもさらに破壊力、強度を増したアーム。爪の配置も上に2本下に1本とモデルチェンジを行っている。 爪の先をさらに鋭利にすることで攻撃力を上げている。CROW-Cよりも爪を巨大化させていることも特徴の一つ。この頃から、物を掴むという概念で製造されなくなり、格闘戦闘のアームとして完成している。
CRAW-B	B型デバイスバージョンのみに装備されているアーム。 形状は〔CROW-C〕と同様で、改良型だと思われる。
TYPE 11 CLOW	別名〔RAVEN CROW〕。 形状自体はCROW-Bと同じである。CROW-Bのアームは、爪自体に関節がないために主に「殴る」という戦い方だったが、RAVEN CROWは爪にも関節を設けることによって、爪で引っかく、握り潰すということも可能となっている。また、手首に関節を設けることによって360度の回転が可能。格闘向けの汎用を重視したタイプとなっている。 また、〔RAVEN CROW〕に関しては実際使用されてはいないが、Right Armも開発されている。

内蔵打撃機構

基本的にRight Armのみ製造されている。全体パーツに比べてマニピレーターが小さめに見えるのは、通常のヴァンツァーの1.4倍もあるために銃火器を装備することが出来ないのである。そのため通常の銃火器を装備させるために、マニピレーターだけが通常ヴァンツァーと同等の大きさに作られている。このアームで格闘することはあまりなくウラニオ・マシンガン等が通常装備となっている。

O.C.U.に渡ったRAVENに限り、ウラニオ・マシンガン装備することは無くその場の戦況に応じてセットアップを変えていたと思われる。そして”TYPE 11 CLOW”と同じく、このタイプだけは左右のアームが開発されている（実際に装備はされていない）
またゲイル搭乗のB型には、〔ZIEGE P（ツィーゲ・ライフル プロトタイプ）〕が標準装備されている。オリジナルのライフルには、攻撃力、命中率ともに劣るが遠距離狙撃が可能となっている。この頃にはオリジナルはU.S.N.が所持していた事（後にキャニオンクロウの手に渡る）が判明しているため、製造数の少なさから急遽プロトタイプを装備することになったものと思われる。

TYPE-11 MG

内蔵打撃機構と同じくRight Armだけが製造されている。

大型の腕部・マシンガン内蔵アームで、連射力、命中率等あらゆる面において優れている。弾にも工夫がされており貫通力がライフル並と言われている。しかし、内蔵キャノン同様実戦データが少ないのが現状。

TYPE 11 CANNON

RAVENには珍しく、左右の腕が製造されたキャノン内蔵腕部。遠距離の敵に攻撃することを目的に製造された。その破壊力は、要塞の大型砲台と同等と言われている。通常のキャノンは敵機に接近されると手も足も出せなかったが、RAVENはその機動力、腰部の回転力によって格闘戦を挑まれても発砲可能となっている。しかし発射後の次弾装填に時間がかかってしまうために、接近戦をあまり得意としていない。

B型デバイスバージョンの腕部にも同様の名称のアームがあるが、こちらは内蔵マシンガンが装備されている。〔TYPE-11 MG〕を改良したものと思われるが、スキルと併用すればその威力は想像を絶する。

RAVENと巨大機動兵器

BDシリーズのB型の開発に少し遅れてS型の開発も進められていたが、B型は性能は高いものの不安定という問題を抱えていた。そしてB型の不安定の問題は加速剤と精神抗性剤の調整で完成しかけていたが、一足遅くS型が先に完成を迎える。B型は、サカタ・インダストリが主に開発していたが、S型はサカタ・インダストリが試作品を製造し、完成させたのはザーフトラ共和国と言われている。
そしてロングリバース島にて使用されたS型は通称〔МИР ОРЛЕН（※）〕と呼ばれ、初の実戦配備されたS型として知られている。実戦配備はされたものの完成していたかどうかは不明で腕部に関して言えば、右腕は完成していたが左腕に関しては配線等が剥き出しになっており、使用は困難だったと思われる。機動力はその巨大さ故（完成していないためかもしれないが）、皆無に等しくその場から動くことすら難しい。

最大の特徴は、S型搭載WAP（RAVEN）との融合であり、胸部にRAVENを格納し戦闘を行う事が出来る。万が一、破壊されたとしてもRAVENは分離し戦闘を続けることが可能。攻撃力は内蔵マシンガンのみとなっているが、その破壊力は凄まじく遠距離射撃も行う事が出来る。（マシンガンの名称は機体名と同じくМИР ОРЛЕН）
また、記録には残っていないが、右腕による格闘戦も可能となっている。



МИР ОРЛЕН

※ МИР ОРЛЕН

正式名称: Sakata Type XXPT

日本名 : ミール・オルレン

日本語訳: 平和の勲章（証）

雑記

▼フリーダム近郊にて確認された戦闘記録

第二次ハフマン紛争時、O.C.U.のフリーダム奪回作戦における市街地攻防戦においてフリーダム南東の廃墟にてRaven及び特殊部隊が確認されている。しかし、この事実は一般には公表されておらず軍内部でも知る者は少ない。さらには胎児の脳を使用したバイオニューラル・デバイスの実戦テストも兼ねていたが、これは機密事項とされドリスコルを含む数名以外は名目上、フリーダム死守による駐屯とされていた。

O.C.U.の一部軍上層部もこの事実を知っていたが、バイオニューラル・デバイス開発は両軍にて行われていたためこの事実を黙認していた。そしてO.C.U.軍占領区担当整備兵であり、初期段階のRaven開発に携わっていたSengyou.Li伍長がこの極秘作戦を友軍の壊滅という状態により知ることになる。伍長はこれ以上友軍に被害が及ぶことを懸念しある人物にRavenの破壊を独自に依頼していた。

『激戦区のある廃墟に敵部隊が潜伏しているという情報がある。どうやら、O.C.U.拠点を攻めるための補給地点として使用しているようだ。

基地の精鋭部隊が激戦区へ向かったが・・・

この映像を見てくれ。敵部隊の主力は予想を超えるものだった。

この機体の名は『Type 11 "Raven"』、サカタインダストリィとドミトリー公社が極秘に開発している重量級ヴァンツァーだ。

・・・数年前、まだ開発が初期段階のとき俺が携わっていたんだ。

まさか、試作段階に入っているとは・・・

Ravenはある特殊デバイスの搭載を前提に開発された機体だ。だが当初はデバイスの質、量共に問題があり開発中止の声もあがっていたが・・・

あれはヴァンツァーじゃない！

化け物だ！なんとしても破壊してくれ！Ravenの出現が確認された廃墟は『激戦区10セクター40』必ず5人の小隊で出撃してくれ。敵部隊の補給地点になっているため各ポイントには地雷が仕込まれているらしい。戦闘中は十分に注意してくれ。』

”新型高機動兵器出現”と呼ばれたミッション名は出撃した友軍部隊の全滅という結果を招いた。依頼を受けた人物は独自の部隊を編成しRavenの迎撃へと向かったが、O.C.U.軍もグランド・ガンボート構想の試作機の実戦テストを兼ねてGriffin（グリフィン）をはじめとした部隊を対Raven迎撃として送り込んでいる。もちろんバイオニューラル・デバイスの真実を知らぬ者たちであった。



Raven（レイブン） / フリーダム近郊廃墟



Griffin（グリフィン） / フリーダム近郊廃墟

グリフィンとはO.C.U.軍が、「グランド・ガンボート構想」に基づいて極秘裏に開発を進めていた次世代大型機動兵器。軍はO.C.U.内最古参のヴァンツァーメーカーであるジェイドメタル＝ライマン社（当時ジェイドメタル社）に機動力と火力を併せ持つ機動兵器の開発を依頼し、初めて試作機による実戦投入されたのがこのグリフィンである。開発コード”OSV-XX「Griffin」”と呼ばれ、初期段階の開発に携わっていたAlberto De Luca伍長（現U.S.N.占領区整備兵）は「対局地戦を想定し単機による制圧を目的に設計されている。」と語った。

機動力はRavenと同等、武装はRight ArmにSG、Left ArmにMG内蔵格闘腕を装備している。Left Armは射撃戦と格闘戦で可変する仕組みになっており、戦況に応じて瞬時に変更することが可能である。さらには両肩に大型の専用シールドも装備している。また同じO.C.U.メーカーではあるが、経営方針の違い等からジェイドメタル＝ライマン社とサカタ・インダストリィは提携を結んではないため、BDシリーズ搭載の可能性は限りなく低い。

今回、フリーダムに現れたのは事前に計画されていたものではなく、Raven出現により急遽投入されたと見るのが妥当であり、性能面では申し分なかったがソフトウェアの不安定さを残す形となった。グリフィンは第二次ハフマン紛争中、フリーダム近郊の廃墟にて撃破され回収されたが、ソフトウェア欠陥の調整が上手くいかず終戦を待たずして開発中止となってしまう。しかしジェイドメタル＝ライマン社は、グリフィンのデータを基に以後もグランド・ガンボート構想の機動兵器開発を続行、後にアロルデシュ・クーデターに正式投入されたゴールトン・シリーズ（OSV-08 / GOALTON a～f）を完成させる。

※Griffin（グリフィン）

グリフォンやグリプスと呼称されることもある。

鷲（または鷹）の上半身と翼、ライオンの下半身をもつ伝説上の生物。

コーカス山中に住んでいるとされ、鋭い爪で牛や馬を数頭掴んで飛べたという。

※グランド・ガンボート構想

O.C.U.軍はヴァンツァーの欠点である火力の弱さを補うため、広範囲戦での主力となるべき強大な火力を備えた大型機動兵器の開発を進めていた。グランド・ガンボート（地上砲艦）と呼ばれた構想は、圧倒的な火力による殲滅を目的としているが、機動性や運用コストなどの向上も同時に図られた。グリフィンやゴールトン型がこれにあたり、グランド・ガンボート構想を受け継いだグルック型も開発されている。

※ゴールトン

グランド・ガンボート構想を受けて、O.C.U.オーストラリアのジェイドメタル＝ライマン社が開発し、のちに実用化されたのがゴールトン・シリーズ（OSV-08 / GOALTON a～f）である。a型～f型まで開発され初の実戦投入はアロルデシュ・クーデターにおいてのb型であった。地上砲艦の名のとおり、極めて強力な火力を誇る。また、ジェットホバーを採用したことで、機体の大きさを感じさせない高い機動力を得ることに成功している。そしてジェイドメタル＝ライマン社は、ゴールトン型での大型機動兵器のデータを活かしたグルック・シリーズ(OSV-12 / Grook-a～f)の開発にも成功している。

▼O.C.U.正規軍で唯一Ravenを撃退した者たち・・・

Sengyou.Li伍長がRaven撃退を依頼した人物は、5人の小隊を組みフリーダム南東の廃墟へと向かった。Ravenと最新鋭のWAP十数機による編成は廃墟を籠城するように配置され、空爆による集団壊滅を避けるために各小隊は分散した陣形となっていた。

そして5機の小隊はスイングヘリによる強襲制圧作戦を開始し、見事Ravenの目の前に布陣することに成功する。しかしU.S.N.側の増援が確認されていたため、20分以内のRaven撃破が最低条件として提示されていた。正しく死闘と言える戦闘は永遠と思われるほど終わりが見えなかったが、時間が経つにつれRavenの動きに散漫さが現れ始める。『て、敵高機動兵器の熱量が急激に上昇！周囲の友軍機は警戒してください！』Colette Diracオペレーター（初等兵）が危険を察知し小隊に伝えと同時にRavenからは黒煙が上がり始め、不可能と思われたこの作戦はRavenの撃破によって終焉を迎えた。

依頼を受けた人物はO.C.U.占領区基地に帰還しSengyou.Li伍長に任務成功の報告をした。

『撃退に成功したようだな。

・・・よくやってくれた。感謝する。お前が基地に帰還した後、後続部隊がRavenの回収に向かった。

その部隊は消息を絶っている。

考えたくないが・・・。

あの化け物は敵部隊に回収されたのだろう。いずれお前の前に現れるかもしれん。**Raven**の特徴はデバイスの性能によって能力を著しく向上させることだ。優秀なデバイスを搭載した場合、あの化け物の力は跳ね上がる。

・・・悪い予感が当たらなければいいが。』

このフリーダムに現れた**Raven**に搭載されていたバイオニューラル・デバイスの種類は不明である。胎児の脳（後期型）を使用したものかB型のどちらかではあるが、微妙な時期でもあるためどちらのBDかは特定できてはいない。また、回収後の搬送先、搭乗者の氏名、型式等不明な事項が多いのもフリーダムに現れた**Raven**の特徴である。未確認の武装が施されていることもあり、プロトタイプであることはほぼ間違いないだろう。

▼RAVENと同等の性能を持つ異形のWAP

アロルデシュ人民共和国内のクーデターが勃発する以前に、O.C.U.日本に本社を置く兵器企業〔吉田戦車社〕がECの〔シュネッケ社〕と共同し開発したWAP〔嫌なヴァンツァー〕。左右のアームは〔かえるさんパンチ〕と〔ねこさんパンチ〕を内蔵している格闘戦闘アームで、その威力はTYPE 11 CLOWと同等の威力を持っているとされている。また、RAVENは機体の性質上、肩部に装備出来なかったが、嫌なヴァンツァーは装備可能となっている。そして、大量の弾薬を搭載出来る対空ミサイルランチャー〔おたけさん〕を標準で装備している。また、〔MULS-P〕にも完全対応しているため、RAVEN以上の汎用性を実現した。ただ、腕部の長さは他のWAPに比べて短くなっているため、格闘戦をする際は搭乗者の技術力が試される公算が大きい。

ラーニング・コストが現存WAPの中で最大であり、出撃時は膨大なコストがかかってしまう。

フォルムデザインも他のWAPと大きく異なり、全体的に丸みを帯び、正しく人型を思わせる形相となっている。プロトタイプとして開発されたものかどうかは不明だが、確認されているのは1機のみ。現在の所在は定かではないがO.C.U.の手に渡ったと言われている。

▼RAVEN輸送方法

RAVENの輸送手段は他のWAPと同じく専用輸送機（VTOL）や大型船舶（空母）によって目的地まで輸送される。しかし写真のように専用ポッドにて輸送されることも珍しくなく、円柱状のポッドの中にはRAVEN1機が格納されている。

ポッドにも工夫が施されており、輸送完了後すぐ様戦闘活動が行えるようにポッドは内部から破壊しやすいようになっている。写真はU.S.N.海軍戦略空母〔サンタバーバラ〕に搬送されたRAVEN専用ポッドで、戦闘態勢のためにポッドを破壊しているところである。



嫌なヴァンツァー



RAVEN輸送専用ポッド

一 閑話休題 一

レイブンの驚異的な戦闘能力は機体の性能もさることながら、生体コンピュータ「バイオニューラル・デバイス(以下BD)」(※1) による処理能力の高さも起因している。そしてBDの最終型、S型の初の成功例としても知られている。そのBDの開発を紐解いてみる。

2070年、O.C.U.日本にある「坂田製薬（当時）」がO.C.U.オーストラリアWAPメーカー「ハイネマンインダストリジ社」を買収し、「サカタ・インダストリ社」を設立したことから始まる。同年、サカタ・インダストリ社はWAPのコンピュータ精度の低さに目をつけBDの開発(※2) に着手する。



2070年代、培養脳を用いたBDの開発に成功。比較的容易に製造できたが容量や反応速度が伸び悩んだ。アエス（A/C/BD-068）、カロール（Calorl/BD-089Kp）等が流通し始める。他社のコンピュータに比べると性能は申し分なかったが、歴然とした差がないためコストパフォーマンスが悪く、動作も時折不安定になるなど問題を残したものとなった。

同年後半には培養脳では性能に限界があると結論付けられ、人間の脳の使用に切り変わった。そして胎児の脳に情報を記憶させるBDの研究が始まり、Dr.ミゼット・ブラウン主任の下、Dr.ギルモア等が開発に携わっている。これらは市場に出回った記録がなく、搭載された機体も不明のためBDシリーズの中で情報が最も少ない。はじめてから成人の脳を使用したBD(B型、S型)を開発目的とし、胎児の脳はその可能性を確かめるために研究されていたのかもしれない。

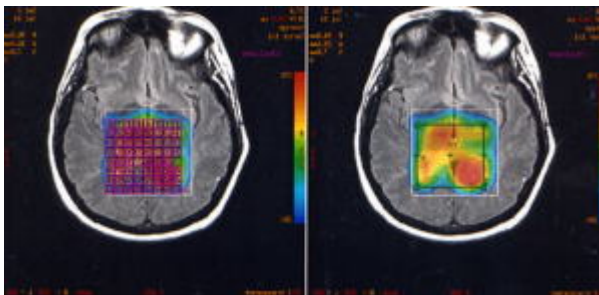
BDの研究が始まった後、ある一つの派生した技術の計画も実行に移された。兵士を人形のように操るプラン、バベット・ソルジャー・プラン（以下PSプラン）(※3) と呼ばれβ組織(※4) が行っていた。これは瀕死の重傷を負ったパイロット（脳死状態）の脳に特殊な改造を施し、獣のような闘争本能、運動能力、反射神経のみを強化させ、機械的に運動中枢や脳の潜在的戦闘経験を刺激し人では不可能な戦闘を行える。逆に思考や感情、人格を無くさせ生体兵器として戦地に送り込ませるというものである。BDと平行して研究されていたため、当初は胎児や幼児の脳(※5) が選ばれ、集められて人体実験が行われた。



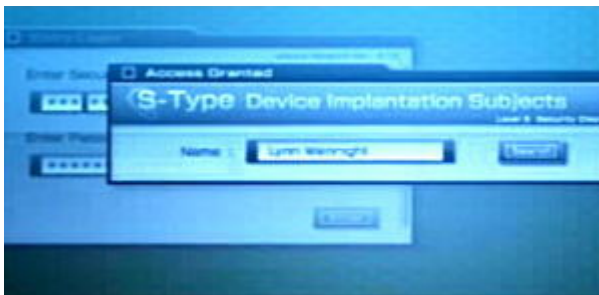
そして成人の脳を使用したBDが理論上可能であると証明されると、PSプランも成人を使用する計画に移行される。主に戦闘で重症を追った兵士が集められたが、時には捕らえたパイロットに拷問を繰り返し、瀕死の重傷を故意に負わせ脳死状態にすることもあった。BDの研究は続けられていたが本格的な臨床実験が行われ始めたのは第二次ハフマン紛争（BD開発が紛争勃発の直接的な原因でもある）であり、当時誘拐や兵士の拉致、捕虜への強制執行(※6) など、多くの人間が人体実験を受けた。しかしPSプランの臨床実験が始まったのは2089年で、ハフマン島が緊張状態にあるとはいえ大掛かりな誘拐はできなかった。そこで優秀なパイロットを拉致し、実験施設に送り込む実行部隊“Vampire's”(※7) が組

織された。
最終検査を通過した被験者（※8）や、バイオジャマー（※9）により適合者（※10）と判断された者が施設に続々を集められ人体実験を受けた。その中で実戦テストまで到達したマテリアル（※11）はコードネーム（※12）が与えられ戦場へ送られる計画であった。しかしO.C.U.対吸血鬼部隊とO.C.U.軍少精鋭傭兵部隊（※13）によりβ組織の施設は悉く破壊され、Vampire'sの本拠地も爆発、炎上しこの計画は破綻することになる。BDと同じくO.C.U.、U.S.N.、サカタ・インダストリィ社が共謀したこの計画は、O.C.U.、U.S.N.両軍がこれ以上計画に介入しないことを明らかにし、PS計画は凍結された。

2080年代（推測）、成人の脳（主に兵士）を使用したBDの開発が始まる。B型とS型の2種類あり、先に研究開発が始まったのがB型である（※14）。これは成人の脳髄を摘出し生体コンピュータにしたもので、胎児の脳よりも性能は格段に上がり、さらにはマテリアルの思考能力や判断力、戦闘記憶が伝承される。そのためB型の性能は元の兵士の能力に依存するところが大きく、優秀な兵士ほど高い数値を出した。しかし初期型を搭載された機体に搭乗するには、転換手術と転換訓練を受ける必要があり、これが課題となっていた。そして後期型になると転換手術、転換訓練を必要としないデバイスが開発され、市販されているコンピュータと同様に機体を選ぶことなく搭載できるようになったが、成功例は少なくほとんどが失敗に終わっている。数少ない成功例としてはカレン・デバイス（Karen/SI BD-6kr）やB型搭載レイブンがある。さらにはB型の反応を高めると一定時間後に拒絶反応が起こり、WAPが暴走するというトラブルも報告された。これには加速剤と精神抗生剤の調整によって可能とされたが、調整が完全になる前にS型が完成したため開発中止となった。同年代頃から「満月の夜はコンピュータの精度が上がる」という噂話がどこからともなく流れ始めた。これもBDによる影響なのかもしれない。



そしてBDシリーズの最終形態・・・パイロット自らの脳と制御装置を直結させ人間とWAPを融合させるデバイス、これがS型（開発年は不明）である。パイロットはこれを使用するには外科手術（手術を施されたパイロットをS型パイロット（※15）という）が必要となるが、デバイスをインターフェースに脳から直接入力できるためWAPを自分の身体と同等に扱うことができる。これにより外科手術のみで熟練したパイロットが即戦力として運用できるのである。「モーガン・ベルナルド（※16）」が学会から追放された後も開発は続けられていき、第二次ハフマン紛争停戦後、記録としては初のS型が完成する。ロングリバース島にて確認されたМИР ОРЛЕНである（”[RAVENと巨大機動兵器](#)”参照のこと）。
МИР ОРЛЕНはS型レイブンとの融合を目的にサカタ・インダストリィが製造した大型機動兵器。S型レイブンと融合を図ることで他の大型機動兵器にない驚異的な対応能力を実現した。しかしシステムは完成していたものの機体の製造が間に合わず、完成する前に破壊されてしまう。МИР ОРЛЕНの破壊を含む”ロングリバース島爆破事件”が世間に露呈すると一連事件の真相究明する動きが世界で起こる。これによりBDの非難が高まり、O.C.U.、U.S.N.は事件の一部関与（※17）を認めた。そして2094年、バイオニューラル・デバイスの開発は非人道的な計画として技術研究は永久に凍結された。



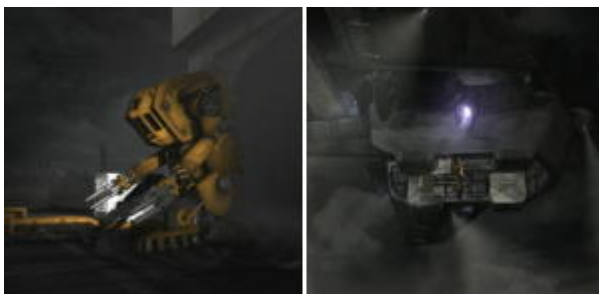
2095年以降、人体の脳をマテリアル化する開発はすでに禁止されていた。しかしBD・S型から派生した技術の応用は各国で盛んに行われているのが現状であった。表向き医療目的（※18）ではあるが、国によっては実験的なシステムをWAPに実装している所もある。操縦するのではなく、文字通りWAPが自分の身体そのものになるのである。派生した技術は義手、義足、患者の反応速度や精密さなど医療においても活躍しているため、各国ともWAPに転用していても黙認しているのが実情であった。そしてS型WAPに対抗する手段も研究されてきた。第二次ハフマン紛争以前に使用されていたバイオジャマーを発展させたもので”新型EMP（※19）”と呼ばれるものである。しかし照射するWAPがS型でないと使用しても意味をなさず、絶大な効果をあげるまでには至らなかった。



2090年代後半、国、企業とも公には開発（※20）はできないためS型の進歩は平行線を辿っているかに見えた。そしてこの頃から死亡事例に何度も登場する人間が現れる・・・モーガン・ベルナルドである。豊富な資金と人脈を利用し、独自のS型を製造、ベルナルド自身が被験者となった。これは今までのS型と違い、S型パイロットの脳に侵入し情報を全てベルナルドの記憶に書き換えることができるというもの。詳細や原理は解明されていないが、WAP搭乗時と同じようにS型パイロットの脳を限界まで瞬時に酷使し、極度に負荷をかけ元のパイロットの記憶を封印もしくは抹殺する。そして脳にベルナルドの情報を入力（声帯までベルナルドのものに変わることもある）し、以後はベルナルドとして活動するのである。これによりまったく同一の思考をもったベルナルドが複数同時に存在することになる。（オリジナルのベルナルドは第二次ハフマン紛争で戦死している）さらには複数存在しているベルナルドは全てリンクしていて、意識も思考も全て並列に動いている。また複数の思考や記憶を同時に処理でき、多くの固体を得ることで死という概念を超越している・・・一固体が消滅しても思考、記憶は受け継がれていくのである。



2112年、U.S.N.アラスカでのM.I.D.A.S.略奪事件（※21）後・・・。
各部隊や専門家から報告されたS型デバイス利用による搭乗者自身をフィードバックコントロールする技術は、大きな波紋を呼びバーゲスト（※22）は転換手術者が多いことから再編制されることとなった。その後、S型デバイスによる搭乗者障害はマイクロマシンの投入により克服するが、転換手術を必要としない脳内スキャンニングの新技術に代替され、旧デバイスは搭乗者への負荷を理由に完全撤廃が決定された。



人間の脳は140億の細胞でできており、容量は10テラバイト程度と言われている。そして脳の機能については未だに未解明な部分が多く、精神活動

に至っては哲学的に語るのみとなっている。解明もされていないものを制御しようとしていたこと自体間違っているのかもしれない。第二次ハフマン紛争時、多くの兵士が拉致され人体実験を受けた。BDは医療の分野では役立っているかもしれないが、数え切れない犠牲の上に成り立っておりその代償は大きかった。

▼備考

- ※1 **Bioneural Device**。ニューロアドバンスド・コンピュータやブレイン・デバイスと呼称されることもある。様々なタイプがあり、人間の脳（脳髄）を使用したコンピュータ。
- ※2 コンピュータのチップに変わるものとして生体部品（人間の脳を記憶装置として使用）を使うというアイデアは20世紀からあり、これ押し進めバイオコンピュータ（当時は培養脳）として開発されたのがWAPの制御を行う生体部品、BDである。様々なタイプがあり反応速度は飛躍的に高まるとされたが、量産に難があり効果が疑問視されていた。
- ※3 **Puppet Soldier Plan**（PSプラン）。「貴重な兵士を消費させないクリーンな兵器開発」と称し、O.C.U.、U.S.N.両軍により進められていた。この計画は記憶の欠片が増幅すると精神崩壊を起こし、命令を拒否し始め制御不能に陥ると言われ、実験機も不安定なものが多かった。これらの機体は動力や神経接続フィルターを接続することによって起動する。（メインスタッフ：Dr.アイシャ他）
- ※4 β組織とはO.C.U.対吸血部隊が仮称として名付けただけで正式な名前ではない。サカタ・インダストリ社（PSプラン）を研究開発する部門であり、全体の構成や人員等詳細はわかっていない。またVampire'sはこの組織が独自に編成した傭兵部隊である。
- ※5 始めはあまり記憶が入っていない脳、つまり胎児の脳を使用するために世界中の孤児を集めていたが、次のステップとして幼児の脳を使用するために表向き医療目的として肢体不自由者等をハフマン島に連れて来て素体とした。施設に集められた子供たちは被験者と呼ばれ、様々な検査を受けた後適合者と不適合者に分けられた。
- ※6 第二次ハフマン紛争の最中、その混乱の中で多くの兵士が集められた。相当数の兵士が犠牲になっており、奪われた人命は第二次ハフマン紛争の戦死者を上回るとも言われる。
- ※7 ヴァンパイアズ、吸血鬼部隊とも呼称。サカタインダストリ私設傭兵部隊であり指揮官は研究機関の技術者でもあるリッチ（ファンタジーネーム：X-20）及びレイブ（ドリスコル、ファンタジーネーム：X-06）。ファンタジーネームを持つ30名（サポート傭兵は300名前後）で構成されているサカタ・インダストリ社（PSプラン部門・β組織）の傭兵部隊で、WAPは黒いカラーリングで統一されている。主な任務は優秀なWAPパイロットの誘拐（傭兵部隊捕獲作戦）やPSプラン実験機の実戦テスト。また、大型機動兵器の戦闘データ収集も行っている。部隊内でもPSプランの存在は公にされておらず、一部知る者たちは極少数であった。ヴァンパイアズはナンバーズの頂点に“バーサーカー隊”を置き、中でも中枢任務を担う小隊があり、現在判明しているのは“魔道士隊”、“ゲイボルグス隊”、“ケルベロス隊”である。なおヴァンパイアズは原則として除隊は認められず、ファンタジーネームの傭兵の殆どがマテリアル候補だった。
- ※8 集められた被験者で最終検査をパスすると、ケーブルでWAPと人体を神経接続させられる。一度繋げられると通常の生活には戻れず、生体兵器になるだけだった。しかし、神経接続は使われていない組織まで活性化するために、車椅子生活の孤児がこの神経接続で歩く脚の感触を体感することができたとの報告もある。神経接続の失敗、暴走や死亡の場合は研究室の標本になっていた。
- ※9 BDはマテリアルとしての条件はないが、PSプランのパイロットは個々の脳波がシステムに適合していないと機能しないという欠点をもつ。それを判別するのが選定機、Bio Jammer（バイオジャマー）と呼ばれる電磁兵器である。WAPのEMPとは違い人体の脳波に直接影響を与え、激しい頭痛を起こさせる。また発作的に激しい頭痛を先天的に持つ者は、このバイオジャマーにかかることはなく不適合者となる。
- ※10 PSプランのマテリアルとして脳が対応（適合）している者たちのこと。初期段階では様々な検査を行わなければならないが、診断結果が出るまでに時間がかかっていたが、バイオジャマーの開発によりある程度は適合者の選別ができるまでになる。なお適合者にならなかった者は“不適合者”と呼ばれ幼児、胎児は本国に送還され、成人の場合は廃棄処分された。推測ではあるが、PSプラン試験体では
- ※13 O.C.U.対吸血部隊は通称“ストーム隊（又はO.C.U.独立傭兵部隊）”、ストームを隊長とし隊員は4名で軍からの正式な発表はないが特殊部隊がらみの作戦を実行している（籍はO.C.U.陸防軍 第1軍機械化師団国境維持部隊・第18傭兵部隊基地）。O.C.U.軍少数精鋭傭兵部隊は通称“チャリオット隊（又は特命傭兵部隊）”、サーナを隊長とし隊員は4名でβ組織とサカタ・インダストリ社を調査するのが主任務である。チャリオット隊はVampire'sが壊滅したのを見届けると解散となったが、ストーム隊はβ組織やVampire's残党の掃討作戦が終了するとC.I.S.U.で凍結されていた「陸防軍第2軍機動部特殊部隊デルタ」へ移籍している。
- ※14 主な研究施設はラーカス地区にあるサカタ・インダストリ社医療施設。医療施設ではあるが、工場と言ったほうが正しい。ここでは次世代WAP用の生体パーツである人工的な脳と脊髄のシステムを量産しており、これを「コアシステム」と呼んでいる。後にこの施設は襲撃、爆破され第二次ハフマン紛争の直接的要因となった（ラーカス事件）。
- ※15 WAPに搭乗の際、本来依存しない器官を操る為に脳を限界まで酷使する。そのため搭乗者の運動野と感覚野が異常発達する。感覚器は数百倍の感度になり、WAPのパーツに応じて余分な器官が現れる。膨大な情報を強制的に叩き込まれ、思考も記憶も人格を司る領域までも侵される。実験では8割が精神崩壊を起こし、正常にWAPを操れても確実に記憶障害を起こすと言われている。原因は解明されておらず、フィードバックされる過電流が神経接続を断ち切るという説もある。記憶障害については段階別されており、障害進行度A+〜G-に別けられる。
（障害進行度の例は下記を参照のこと）
 - ・障害進行度：A- 情報記憶の欠落が10%未満の軽度障害者。幼少期の記憶が欠落するなどするが戦闘、生活に支障はない。まれに記憶が無いにも関わらず、過去の体験を繰り返すことで感情だけが表れることもある。
 - ・障害進行度：G このレベルは最終段階で個人的情報記憶の欠落が80%を超える重度障害者。精神活動は検知されることはなく、脳機能に残されているのは生命維持と本能程度と思われる。言語や感情、思考も生まれず、機械で補わなければ会話も理解も動くことすらままならない。
- ※16 **Morgan.Bernardo**。年齢不明、国籍不明、推定年齢48歳、国籍はアイルランドとも言われている。BD・S型提唱者であり、基礎を作った男。もともと脳神経学の臨床分野の権威だったが、この理論の発表で学会から追放された。以後、テロリストに変貌し各国のテロ組織と内通している。以前はヨーロッパと南アフリカを中心に活動していたが、国際犯として手配されるとアジア地域に移り潜伏している。ベルナルドが率いるテロリスト集団は「グリムニル」と呼ばれている。
- ※17 O.C.U.、U.S.N.が事件関与を認める中、ザーフトラ共和国だけは否認し続けた。しかしザーフトラ共和国大統領、恒平和維持機構事務局長が辞任するなどしている。
- ※18 O.C.U.カンボジア、フォーチュンメディック社（メディカルテクノロジー会社）が有名。医療機器メーカーでCT装置などの病院機器から義手や義足、人工臓器などの代替品、新薬開発まで幅広く扱っている。医療分野ではこれらのコントロールに神経信号を用いており、欠損した部位の延長を補う場合もあれば、S型のように脳からの信号を直接バイパスしてそれらを機器と接続することもしている。精密機器のラインと微細技術、そして豊富な臨床データを持ち、S型転換手術者の詳細なデータベースもこの会社が保有している。
- ※19 **New Style-Electro Magnetic Pulse**。S型パイロットをピンポイントターゲットにしている電磁兵器の一種。生体周波パルスを出出力で放射し、コンピュータと直結されたパイロット本人にダメージを与えることができる。照射されたパイロットは激しい頭痛を伴うことから「脳を焼かれる」と表現することが多い。

トップ成績のミスト、数少ないBD・B型成功例のカレン・ミューア、U.S.N.軍が独自開発したBD・S型の最終試験を唯一パスしたリン・ウェンライト、サカタ・インダストリィ社が研究していた脳のデバイス技術は女性の方が適応しやすいのかもしれない。

※11 生体コンピュータ（BD、PSプラン）に使用される人間の事で、素体とも言われる。主に優秀な兵士が対象であり、マテリアル候補まで入れるとその数は計り知れない。

※12 最終検査をパスし実戦テスト段階のPSプラン実験機にはコードネームが付けられる。確認されているのは3固体で”ゴースト（ファンタジーネーム：X-27、レイジ）”、”ヴァルキリー（ファンタジーネーム：X-04、サーナ）”、”ヴァンパイア（ファンタジーネーム：X-00、フェイスレス）”。なおヴァンパイアは別名「X-00β2試作機」と呼ばれ、ヴァンパイアと同時期に開発されたPSプラン実験機は”アンデッド（ファンタジーネーム：X-00a～d）”と呼称されている。これらコードネームの機体はソフトウェアが未熟だったため近接コントロールが不可欠で、そのため実験機の出撃時には機材を積んだコントロールWAPの同行が必要であった。ちなみにX-00β2試作機の基となったβ1試作機は制御不能に陥り、暴走した後研究施設を灰にしたと言われている。なおこれらの実験機は大破すると、コアシステムであるマテリアルも大半が死亡している。

※20 公には開発できなかったが、どの機関も膨大な機密費を計上し開発を続けていた。U.S.N.軍も特殊作戦軍が極秘裏に計画し、BD技術の応用によって独自開発させたS型を完成させている。これは特殊仕様のプロトタイプ型で、最終試験をパスしたのはリン・ウェンライト中佐（RYNN WENRIGHT）ただ一人と言われている。

※21 O.C.U.日本国防軍が、極秘作戦でU.S.N.アラスカ放射線研究所を強襲しM.I.D.A.S.を強奪した事件。M.I.D.A.S.（Matter Irradiation Type Dissociate Acceleration System）とは金原子核線理論をもとに製造された次世代兵器。使用後は放射線の後遺症がないため「地球に優しい核兵器」と呼ばれ、通常核兵器以上の抑止力をもつ。

※22 U.S.N.軍SOCOM直轄特殊機甲分遣隊。主に太平洋区域を担当する対テロリスト戦特化チームで、その任務性から超法規的な活動もしている。構成している隊員は各特殊部隊からの選別で、実働隊のエリート集団と呼ばれている。